

松江市文化財調査報告書 第188集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書1

朝 酌 橋 ノ 谷 遺 跡

平成30（2018）年8月

島根県 松江市教育委員会

公益財團法人 松江市スポーツ・文化振興財團

松江市文化財調査報告書 第188集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書1

朝 酌 橋 ノ 谷 遺 跡

平成30(2018)年8月

島根県 松江市教育委員会

公益財団法人 松江市スポーツ・文化振興財団

例　　言

1. 本書は、平成 29 年度国庫補助事業として実施した、大橋川改修に係る個人住宅移転に伴う朝橋ノ谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松浦正巳氏から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名 称 朝駒橋ノ谷遺跡
所在地 島根県松江市朝駒町 972-3

4. 現地調査の期間及び報告書作成期間

(現地調査) 平成 29 年 12 月 1 日～平成 29 年 12 月 22 日

(報告書作成) 平成 30 年 5 月 1 日～平成 30 年 7 月 31 日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積：1148.94m²

調査面積：108.26m²

6. 調査組織

依頼者 松浦正巳

主体者 松江市教育委員会

教 育 長 清水 伸夫

【平成 29 年度】現地調査

調査指導 島根県教育庁 文化財課 主任主事 人見 麻生

事務局 松江市歴史まちづくり部 部長 藤原 亮彦

次長(まちづくり文化財課長兼務) 永島 真吾

〃 まちづくり文化財課

〃 専門官(埋蔵文化財調査室長兼務) 飯塚 康行

〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 " " 主幹 川上 昭一

〃 " " 学芸員 三宅 和子

〃 " " 曜託 門脇 誠也

実施者 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 理事長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 課長 曽田 健

〃 調査係 係長 川西 学

〃 " 主任 江川 幸子(担当者)

〃 " 曜託 北島 和子(補助員)

【平成 30 年度】報告書作成

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	藤原 亮彦
"		次長	永田 明夫
"	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行
"	" 埋蔵文化財調査室	室長	宮本 英樹
"	" 調査係	係長	川上 昭一
"	" "	主任	幹 川西 学
"	" "	学芸員	三宅 和子
"	" "	嘱託	門脇 誠也
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野 芳伸 (H30.5.28~)
	埋蔵文化財課	課長	赤澤 秀則
	" 調査係	主任	江川 幸子 (担当者)
	" 嘱託	北島 和子 (補助員)	

7. 調査に携わった発掘作業員

井川智、井川洋、深津靖博、峰谷一雄

8. 本書に記載した遺物の洗浄・復元・実測・浄書、遺構図版の作成は以下の者が行った。

坂本玲子（平成 29 年度）、塙田陽子（平成 30 年度）

9. 本書の執筆は第 1 章を松江市埋蔵文化財調査室が、そのほかを江川が執筆した。また編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て江川が行った。

10. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

【土師器・須恵器】

岡田裕之・土器検討グループ 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国成立と国府成立の研究』島根県古代文化センター

11. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。

12. 本書における遺構ほかの記号は以下のとおりである。

SP：小土坑 SK：土坑 SI：竪穴建物 SB：掘立柱建物 SX：性格不明の遺構

13. 本書で掲載した遺構図の縮尺は、各図に縮率とスケールを明記した。遺物実測図の縮率は原則 1/3 とし、断面は土師器・陶磁器を白抜き、須恵器を黒塗りで示した。

14. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の報告.....	7
----------------	---

第1節 調査地の現況.....	7
第2節 調査の概要	7
第3節 遺構と遺物	12

第4章 総括.....	23
-------------	----

遺構観察表.....	25
------------	----

遺物観察表.....	26
------------	----

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	開発範囲と試掘調査	1
第 2 図	島根県・松江市と朝飼橋ノ谷遺跡	2
第 3 図	朝飼橋ノ谷遺跡位置図（空中写真）	2
第 4 図	朝飼橋ノ谷遺跡位置図（S=1:5,000）	3
第 5 図	朝飼橋ノ谷遺跡周辺の遺跡（S=1:25,000）	5
第 6 図	風土記から復元した朝飼地域周辺（S=1:50,000）	6
第 7 図	朝飼橋ノ谷遺跡位置図（S=1:1,000）	8
第 8 図	調査前地形測量図とグリッド設定図（S=1:300）	9
第 9 図	遺構検出状況（S=1:80）	10
第 10 図	調査区東壁（ $\alpha - \alpha' - \beta - \beta'$ ）セクション（S=1:60）	11
第 11 図	SI100 遺構図（S=1:60・S=1:40）	12
第 12 図	SB101 遺構図（S=1:60・S=1:40）	14
第 13 図	SB101 出土遺物実測図（S=1:3）	15
第 14 図	SA102 遺構図（S=1:60・S=1:40）	16
第 15 図	SA103 遺構図（S=1:60・S=1:40）	17
第 16 図	SA104 遺構図（S=1:60・S=1:40）	17
第 17 図	SD88 遺構図（S=1:40）	18
第 18 図	SK36 遺構図（S=1:40）	18
第 19 図	ピット遺構図（1）（S=1:40）	19
第 20 図	ピット遺構図（2）（S=1:40）	20
第 21 図	ピット遺構図（3）（S=1:40）	21
第 22 図	ピット埋土出土遺物実測図（S=1:3）	21
第 23 図	遺構外出土遺物実測図（S=1:3・S=1:2）	22
第 24 図	遺構変遷図（S=1:200）	23

挿表目次

第 1 表	遺構観察表	25
第 2 表	遺物観察表	26

本文中写真目次

写 真 1	作業風景	7
写 真 2	調査指導風景	7

写真図版目次

図版 1 上	朝飼橋ノ谷遺跡空中写真（北上から）
図版 1 下	朝飼橋ノ谷遺跡調査前近景（西から）
図版 2 上	遺構検出状況 1（東から）
図版 2 下	遺構検出状況 2（東から）
図版 3 上	SI100 検出状況（西から）
図版 3 下	南崖に沿う盛土層 $\beta - \beta'$ （西から）
図版 4 上	SP40 遺物出土状況（東から）
図版 4 下	SK36 土層（西から）
図版 5 上	SP39 柱痕（西から）
図版 5 下	SP72 柱痕（西から）
図版 6	出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

当該地は以前から宅地として利用されていた場所であり、すでに個人の住宅及び倉庫が建っている場所であった。ここで新たに個人住宅の新築及び一部造成が計画され、平成29年8月31日付けで事業者より試掘調査依頼書が松江市埋蔵文化財調査室に提出された。

同年9月14日、現地で試掘調査を行ったところ、2箇所のトレンチ（T-1・2）のうち、1箇所（T-1）で柱穴が検出されたため、遺跡の存在を確認した。平成29年9月29日、文化財保護法に基づいて事業者から遺跡発見の届出が市埋蔵文化財調査室を通じて島根県教育委員会教育長宛てに提出された。これに対し10月2日、県教育委員会からは工事着手前には遺跡の本調査を実施するよう通知があり、事業者に伝達した。

一方、この時点では遺跡の範囲は不明瞭であり、確定にまでは至っていなかった。このため、10月13日に市埋蔵文化財調査室で再度現地に2箇所のトレンチ（T-3・4）を設定して試掘調査を実施したところ、遺跡と認められるものは発見できなかった。この調査結果から、遺跡はT-1を中心とした範囲に絞り込まれることが判明し、遺跡及び本調査の範囲が確定した（第1図）。

この後、事業者より本調査の依頼書が提出され、平成29年12月1日に現地で本調査を実施することとなった。なお、開発範囲にかかる魚見塚遺跡部分については盛土を行う計画であるため、本調査対象外としている。



第1図 開発範囲と試掘調査 (S=1:600)

第2章 位置と環境

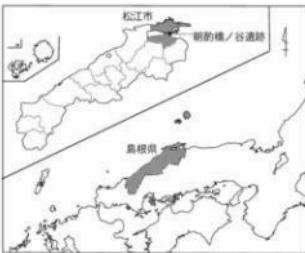
第1節 地理的環境

東西に細長い島根県の北東部には、東西長65kmの島根半島がある。島根半島は北を日本海、東を美保湾、南を宍道湖と大橋川、中海に囲まれ、西の出雲市で本土とつながり、日本海の北約50kmに隠岐の島が浮かぶ。現在では弓ヶ浜半島により中海と美保湾が隔てられているが、奈良時代には弓ヶ浜半島はまだ島であり、日本海が大きく湾入していた（第2・3図）。

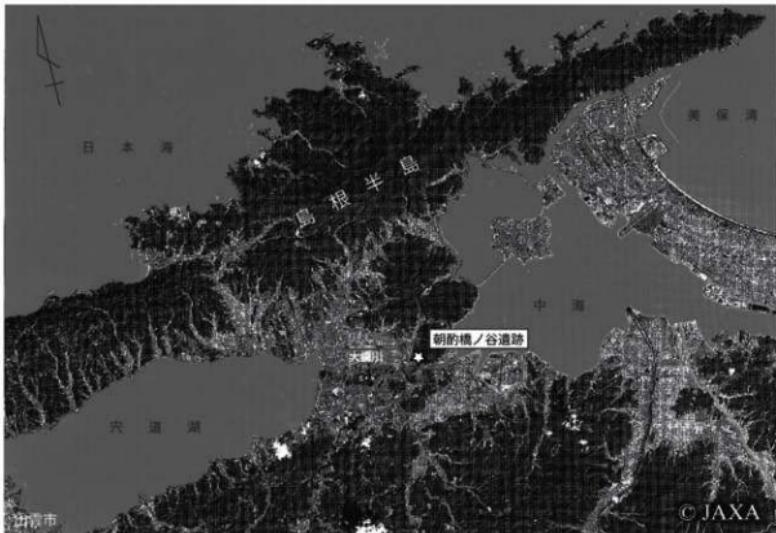
松江市は島根半島の東側約半分と、これとほぼ同じ面積の本土側の土地を合わせ持つ。

朝酌橋ノ谷遺跡は、島根半島と本土を分かつ大橋川が最も川幅を狭めるところの島根半島側、朝酌町に所在する。遺跡は、標高114.1mの独立丘陵から南西に向けてのびる低丘陵先端付近の標高17.0mにあり、大橋川への距離は150mほどである。このあたりは丘陵が大橋川まで迫り、平地の面積は少ない。それでも丘陵傾斜地には畑、狭い谷筋には水田が作られている。

当遺跡の西では5本の川が合流して1本の大橋川となり、中海に流れる様子をみることができる（第4図）。



第2図 島根・松江市と朝酌橋ノ谷遺跡



第3図 朝酌橋ノ谷遺跡位置図（空中写真）

第2節 歴史的環境

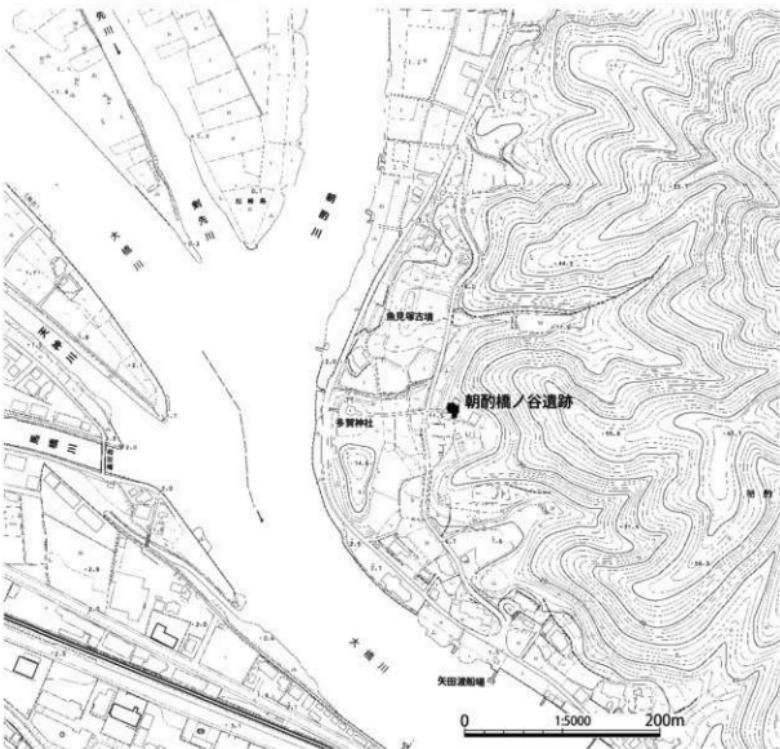
1. 朝酌橋ノ谷遺跡周辺の遺跡

松江市東部に位置する意宇平野には各時代を通して遺跡が密集し、古代には出雲国の国庁が置かれた。意宇平野には東西方向に山陰道（正西道）が通り、国庁の北にある十字街から隱岐国へ向かう道（柱北道）が分岐して千酌駅に向かい、当遺跡はこの柱北道沿いに位置している。

ここでは朝酌町を中心として各時代の遺跡について紹介する。

縄文時代 朝酌町の近辺では、大井町の九日田遺跡（5頁第5図17）があり、後期初頭を中心としたドングリ類の貯蔵穴19基を含む計23基の土坑が検出されている。また、大橋川の北岸沿いの福富松ノ前遺跡、シコノ谷遺跡で中期から弥生時代前期にかけての遺跡が見つかりつつある。

弥生時代 前期は縄文時代晚期から続く九日田遺跡のほか、福富松ノ前遺跡、シコノ谷遺跡から土器



第4図 朝酌橋ノ谷遺跡位置図 (S=1:5,000)

の出土がみられる。中期は不明だが、後期は魚見塚古墳（3）の墳裾から竪穴建物跡が検出され、キコロジ遺跡（6）から後期の漆液採取容器を含む少量の土器が出土している。

古墳時代 前期では、朝酌菖蒲谷遺跡（4）で土器棺墓と、方墳の周溝状の溝が検出されている。

中期に入ると宍道湖縁辺部に規模の大きい古墳が一定の間隔を保って築かれるようになり、その一環として朝酌川沿いに觀音山古墳群（23）や廟所古墳（地図外）といった古墳が築かれている。觀音山1号墳は一辺40m前後の方墳で、葺石と埴輪を持ち、大刀類や銅鏡などが出土し、廟所古墳は一辺60m前後の方墳で、造出しがあり、葺石と円筒・象形埴輪を持つことが知られている。

後期に入ると茶臼山の西麓に大庭鶴塚古墳（41）や、山代二子塚古墳（40）、山代方墳（39）、永久宅後古墳（38）といった出雲東部の最高首長墓群が築かれる。

朝酌町でも全長61mの前方後円墳、魚見塚古墳（3）が築造され、朝酌岩屋古墳（8）は墳丘が残存しないが、切石の整美な石棺式石室を持ち、玄室の内壁には現在も赤色顔料が残る。このほか朝酌上神社跡古墳（20）、旧朝酌小学校校庭古墳（21）、5基からなる九日宮古墳群（地図外）、阿弥陀寺古墳（5）が築造されており、いずれも小規模ながら主体部に石棺式石室（垂流を含む）を持つことに共通点が見られる。廻原古墳群（22）は大半が消滅しているが、本来は10基以上の横穴式石室を持つ古墳からなる群集墳と伝えられ、このうちの1号墳は一辺10mの方墳で、横口式石郭を持つ特異な終末期古墳として知られている。

朝酌地域にこれだけの古墳群を築いた人々の集落遺跡としては、台地上の天井遺跡（7）や、キコロジ遺跡が有力と考えられる。キコロジ遺跡では主頭大刀の柄頭や漆の付着した容器などを含む大量の遺物が、天井遺跡や南東の丘陵から流れ込んだ状況で出土している。

一方、朝酌町の北東に位置する大井町では5世紀末には廻谷窯跡（12）で須恵器生産が開始されている。操業は9世紀まで継続されており、その内6～8世紀の間は出雲国内の須恵器生産を独占している。この頃の窯跡には寺尾窯跡（16）、ババタケ窯跡（11）、岩汐窯跡（10）などがある。須恵器工人の集落は別所遺跡や鶴沢A遺跡（地図外）、墓は池ノ奥C、D遺跡（18）の周辺で陶棺墓が検出されている。須恵器生産を直接統括していたと目される人物の古墳は、窯跡近くに位置して石棺式石室ではない主体部を持つ山巻古墳（14）やイガラビ古墳群（19）などと考えられている。

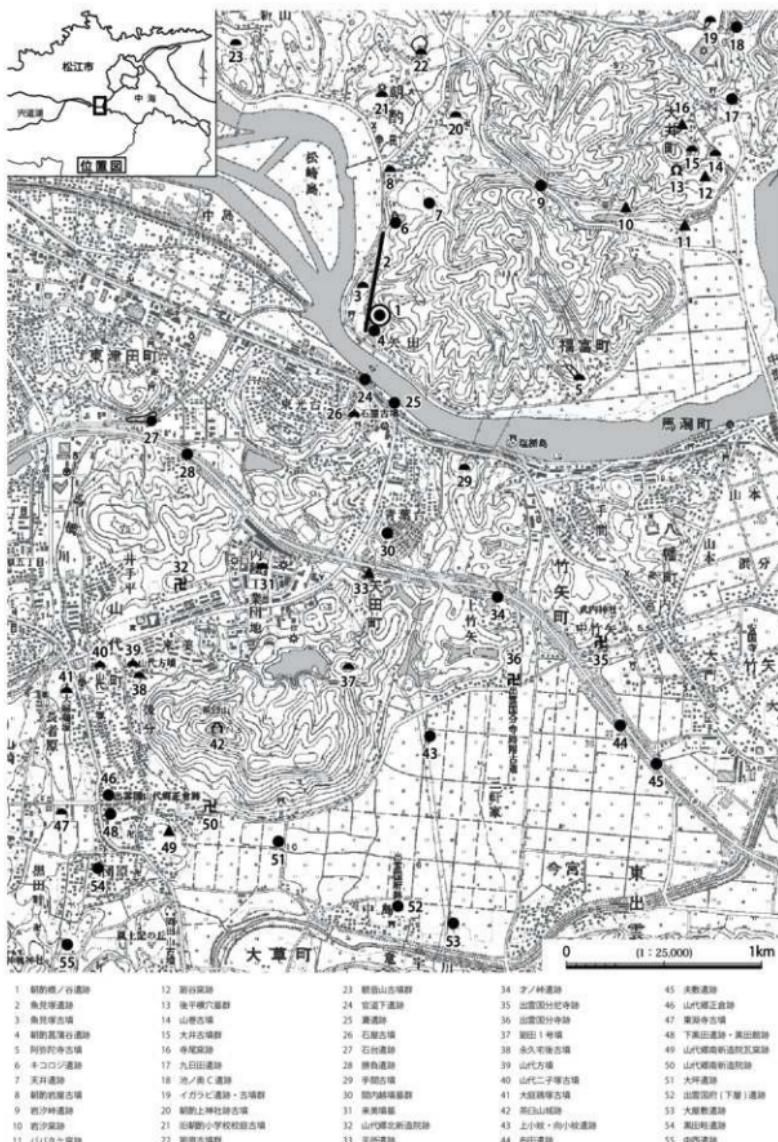
古代 出雲国では7世紀末には意宇平野に国庁（出雲国府跡・52）が設置されている。

魚見塚遺跡（2）では国庁の北の十字路から発して隱岐国へ向かう官道路（枉北道）が検出され、その沿線にあるキコロジ遺跡では9世紀初頭までの遺物が多く出土しており、漆容器や挽物の漆器椀のほか、綠釉陶器などの出土から、手工業生産と有力者層の存在が窺える。朝酌菖蒲谷遺跡でも8～9世紀の多数の土器を伴う遺構が検出されているが、遺跡の性格は明確にできていない。

大井町では引き続き須恵器生産が継続されており、イガラビ遺跡（19）や池ノ奥A遺跡（地図外）では円面碗や水滴が出土して官衙的様相がみられ、鉄鉢形土器や托など仏教関連遺物も出土している。

中世 意宇平野が弓|き続き中世府中として出雲国の中心となり栄えている。

朝酌町周辺では、岩汐峠遺跡（9）で16世紀頃の石で囲われた一字一石経塚、三大寺遺跡（地図外）では13基からなる古墓群が検出されている。山城としては和久羅城跡（地図外）が築かれている。



第5図 朝酌橋ノ谷遺跡周辺の遺跡 (S=1:25,000)

2. 『出雲国風土記』にみえる朝酌促戸の様子

733年に編纂された『出雲国風土記』(以下「風土記」)には、朝酌地域の奈良時代の様子が、島根郡条に詳しく記されているので以下に訓読み文を掲載し、簡単に説明を加える。

割瘻文

朝倅促戸とは朝倉地域の大橋川が川幅を狭めているところ大橋川北岸一帯を指す。そこには東に道があるって、西には原があり、その間に渡し場がある。この渡し場が朝倉渡のこと、出雲国府と隱岐国府を連絡する、枉北道の渡河区間にあたる。『風土記』巻末総記には、ここに官の渡し船が1艘備えてあったと記されている。

また、当遺跡の北西の川では笠漁が行われてたくさんの魚が捕れ、海藻にも恵まれていたようである。自然と市がたち店ができていたということであるから、海産物だけではなく、様々な物資が対象となっていたことが窺われる。

また、国内外から人々が集まつたとされる歌垣の場、邑美冷泉と前原崎にも近い。

朝倉促戸は国府が置かれた意宇郡と島根郡を結ぶ官道が通る場所であるとともに、中海と宍道湖を結ぶ水上交通の要衝でもあり、多くの人や物資が往来する場所であったことが想定される。



第6図 土記から復元した朝酌地域周辺 (S=1:50,000)

[第2章]

第6図 島根県古代文化センター 2014『解説出雲國風土記』の「朝酌地域の景觀」94頁をトレーク・加筆して作成した

第3章 調査の報告

第1節 調査地の現況

朝酌橋ノ谷遺跡は低丘陵の先端付近に位置している。

ここでは丘陵の山手がカットされ、東西に細長い平坦地が造られている。平坦地の標高は 17.50m 前後を測り、西に接する道路からの比高は 6m ほどである。平坦地の東端には民家、西には倉庫が建っているが、調査時点では空家であった。

平坦地の東には朝酌菖蒲谷遺跡のある丘陵との間に谷があり、谷の西側は民家、一段高い東側は畠地として利用されている。本来は丘陵端部が若干陥入した地形であったと思われるが、大きく地形の改変が行なわれているようである。

周辺では、前章で述べた魚見塚古墳が当遺跡の北西 70m に築造されており、魚見塚遺跡が最も近いところで西方 10m、朝酌菖蒲谷遺跡が南方 60m に位置するほか、多賀神社（朝酌下社）が西方 90m のところに鎮座している（第7図）。

第2節 調査の概要

1. 調査の概要

平成 29 年 12 月 1 日にグリッド杭を打設して地形測量を行い、12 月 4 日に掘削を開始し、12 月 19 日までの間に 12.5 日を要して調査を実施した。

試掘調査の結果、遺物包含層の削平が確認されていたので、まずはバックホーを使用して地山近くまで客土層の除去をおこない、その後に人力による地山面の精査を行った。

地山面を精査した結果、ピットを中心とした多くの遺構平面プランを検出した。

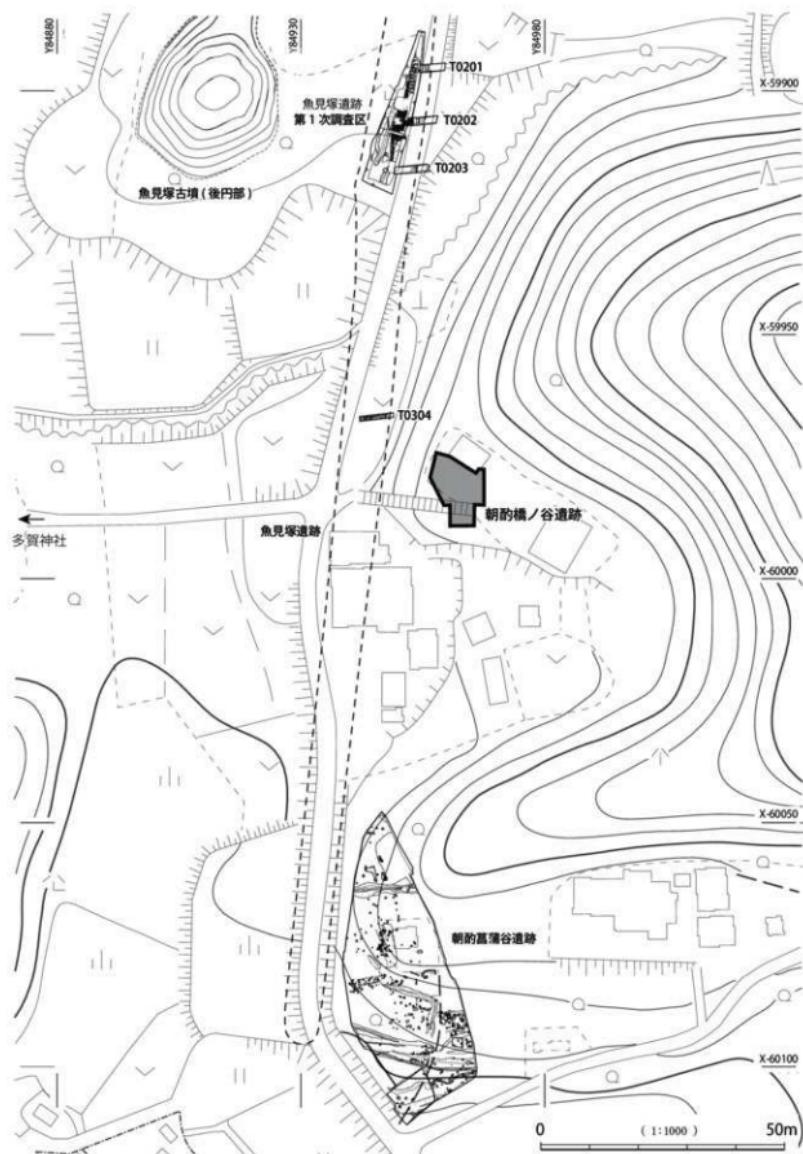
遺構は竪穴建物跡 1 棟（SI100）と掘立柱建物跡 1 棟（SB101）、ピット列 3 本（SA102・SA103・SA104）、土坑 1 基（SK36）、溝 1 本（SD88）のほか、明確な建物を復元することができないピット多数を検出した。ピットは全て平面的に数cm掘り下げて柱痕の有無を確認し、柱痕があるものについて



写真1 作業風景



写真2 調査指導風景



第7図 朝駒橋ノ谷遺跡位置図 (S=1:1,000)

は柱痕の中心を断つように半截して観察した。また、柱痕が無いものについても半截を行なっている。土坑は畦を十文字に設定し、溝は必要に応じて畦を残して掘削し、それぞれ断面図をとり、写真撮影を行った後に完掘した。

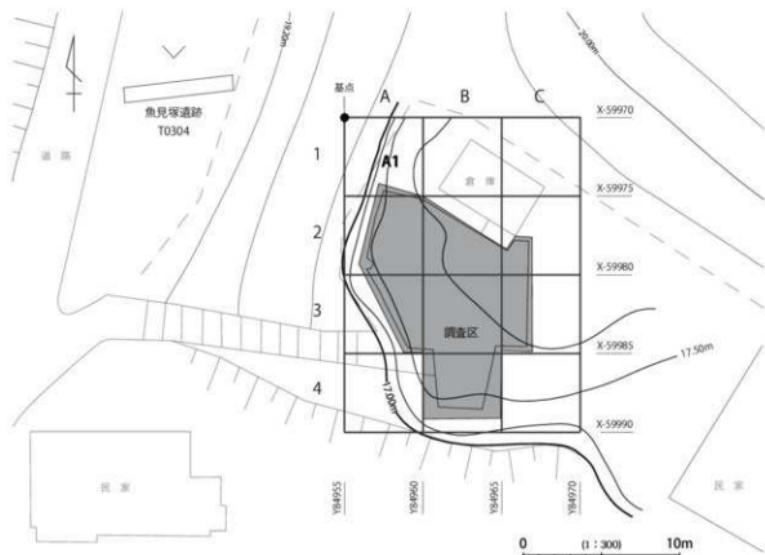
遺物の出土数は少なく、須恵器片 13 点、土師器片 11 点、陶器片 3 点のほか、銭貨 1 点が完形で出土しただけである。

本調査については、ピット群の半截がほぼ終了した時点の 12 月 19 日に、島根県教育庁文化財課から現地で調査指導をいただいている。

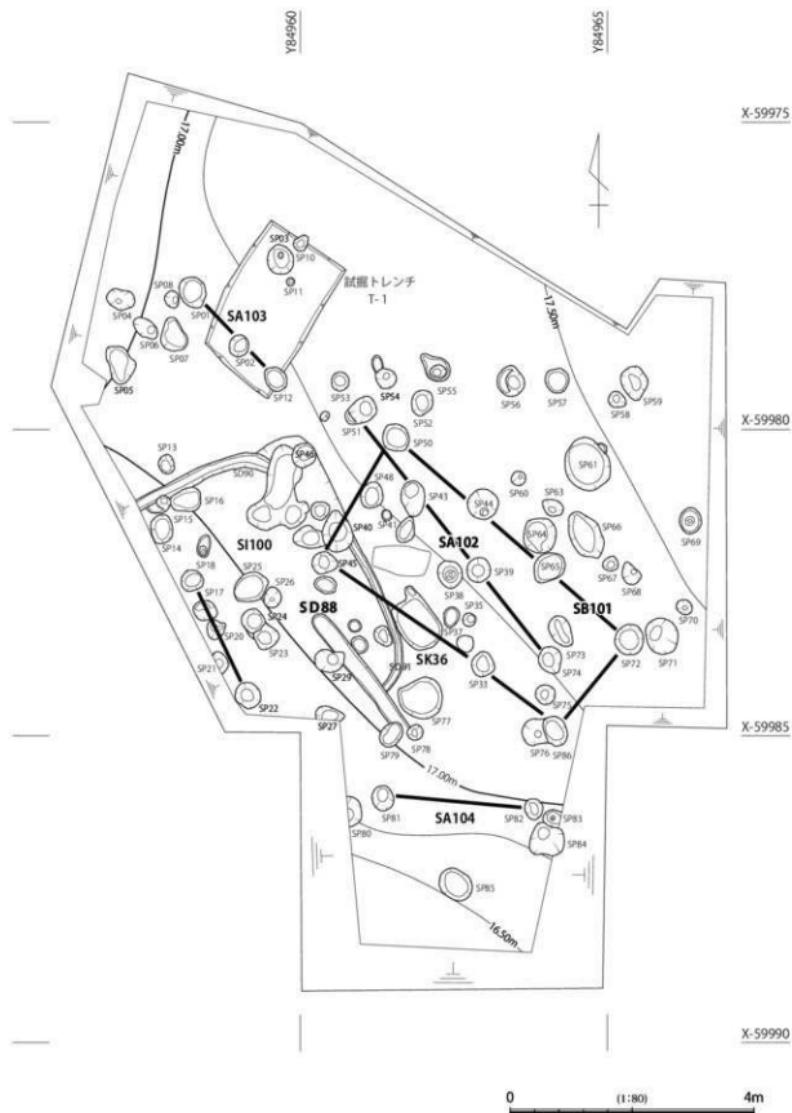
2. 調査区とグリッドの設定

調査区は、試掘トレーニングの調査成果から遺構の広がりを想定して設定した。ただし、南と西は崖になっているため、安全確保のため、調査範囲は崖より 1m 手前までとしている。

調査あたっては、世界測地系の第 III 座標系に基づき、座標軸に沿った 5m 四方のグリッドを設定した（第 8 図）。グリッドは基点を X = -59970, Y = 84955 とし、東に向けてアルファベット、南に向けてアラビア数字を与え、各グリッドの名称はアルファベットとアラビア数字を組み合わせた名称とし、遺構等に伴わない遺物はグリッドごとに取り上げている。



第 8 図 調査前地形測量図とグリッド設定図 ($S = 1 : 300$)



第9図 遺構検出状況 (S = 1:80)

3. 基本層序（第10図）

本遺跡は客土層直下が地山面である。

調査区西端の一部で炭を含む硬く締まった層が薄く検出され、遺構上の自然堆積土の可能性が考えられたが、わずかな範囲で遺物は出土していない。調査区の大半は客土層直下が遺構面であり、遺構面自体も広い範囲で削平された状況と考えられる。

以下で、平坦面中央付近（ $\alpha-\alpha'$ ）と平坦面南端付近（ $\beta-\beta'$ ）に分けて詳細を述べる。

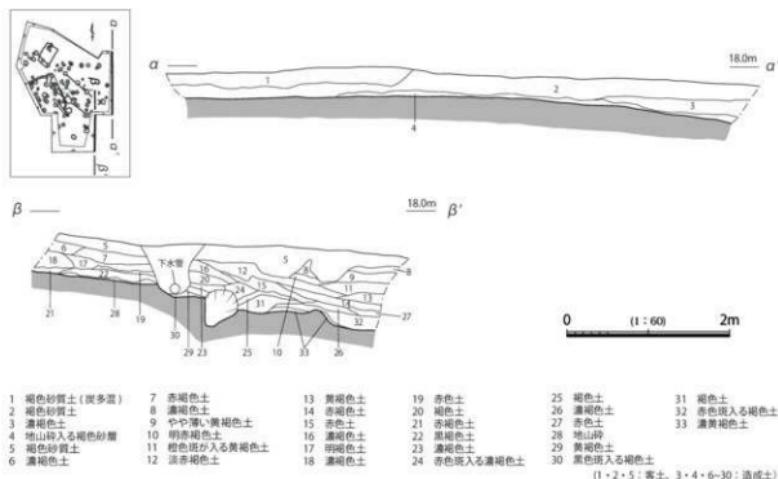
(1) 平坦面中央付近（ $\alpha-\alpha'$ ）

1・2層は客土、3・4層は $\beta-\beta'$ で顕著な造成土と思われる。地山までの深さは30cm前後である。なお、1層は平坦地完成後の搅乱土であろう。

(2) 平坦面南端付近（ $\beta-\beta'$ ）

平坦地の南辺は垂直に近い崖状となっているが、ここは遺跡が立地する丘陵の南斜面にあたり、東へ行くほど地山の標高が下る傾斜地になっている。土層（ $\beta-\beta'$ ）を観察すると、この傾斜地を平坦地に造成するため、少しずつ粘質系の土を入れて標高を高くし（8～33層）、最終的に平坦面一面に見られる褐色砂質土（5層）で覆って均した様子が窺える。8～33層は濁りがみられないことから、北の丘陵でカットした地山が使用されたものと思われる。

平坦地の造成が行われた時期は明確でないが、地山面で検出したピット内から出土した最も新しい土器が17世紀末～18世紀の陶器であったことより、その時期以降であることは確実である。



第10図 調査区東壁（ $\alpha-\alpha' + \beta-\beta'$ ）セクション（S=1:60）

第3節 遺構と遺物

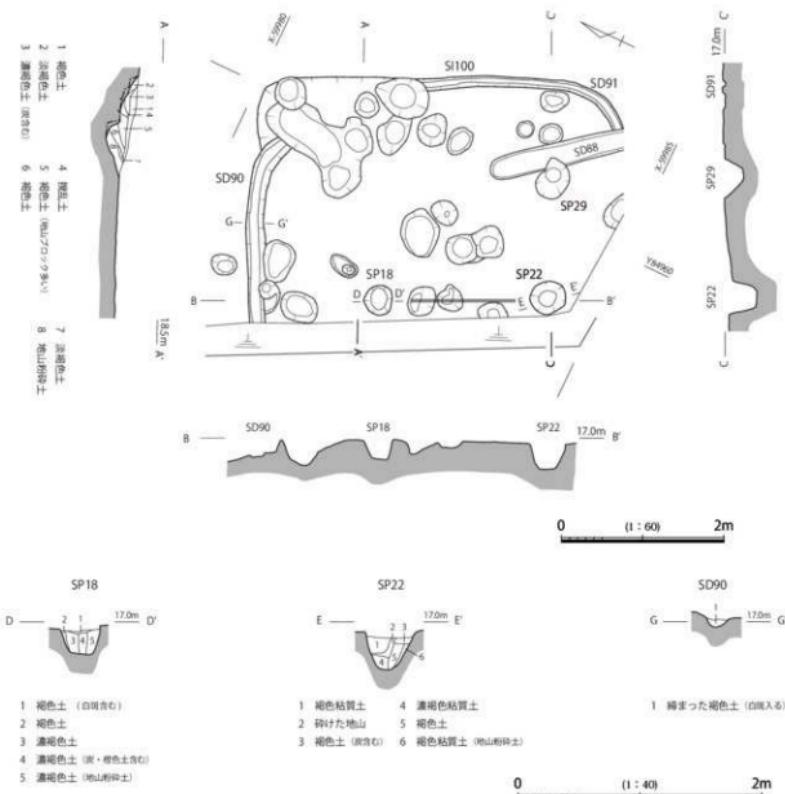
遺構は、竪穴建物跡1棟(SI100)と掘立柱建物跡1棟(SB101)、掘立柱建物を構成していたと考えられるピット列2本(SA102, SA103)、柵を構成していたと考えられるピット列1本(SA104)溝1本(SD88)、土坑1基(SK36)を検出した(第9図)。

以下では、遺構ごとに遺物を含めて詳細を述べる。

また、建物跡等の復元ができなかったピットも多数を検出しているので報告する。

① 竪穴建物跡 SI100 (第11図)

調査区西端に位置し、全体の約半分が残る、平面プラン閣丸方形の竪穴建物跡である。



第11図 SI100 遺構図 (S=1:60・S=1:40)

後世の削平により、壁際溝 SD91 は溝 SD88 よりも西側では残っておらず、規模は明確でないが、一辺（北西—南東）4.5m 前後に復元できる。

壁際溝 SD90 は幅 20cm、深さ 10cm を測り、埋土は地山由来の白斑が入る褐色土 1 層、南東部は調査区外へと続く。SD91 は幅 15cm、最深部で深さ 10cm を測り、埋土は炭が混じる灰褐色土である。SD90 と SD91 は埋土の色調や土質が全く異なり、北の隅では若干互い違いが生じているうえ溝の痕跡は残っていないが、後世の遺構面に及ぶ削平によって溝の深いところだけが検出された状況とみておく。

壁際溝の内側には深い柱穴が多く、建物を構成していた柱穴は明瞭でないが、壁際溝に並行して位置する SP18 と SP22 の 2 柱穴がこれにあたる可能性が高い。SP18 と SP22 は芯々距離 2.1m、両柱穴から東の壁際溝までの距離は 2.7m を測り、柱穴の半截断面を観察すると、SP18 には径 8cm 程度の柱痕（4 層）があり、SP22 には径 10cm 程度の柱痕（5 層）がある。

当地域における隅丸方形の竪穴建物は 4 本柱の建物が主流であるが、ここでは 2 柱穴が竪穴建物跡の東西を 2 分割する場所に位置することから、2 本柱の竪穴建物であったと推定する。

隅丸方形の竪穴建物は、このあたりでは弥生時代後期後半～古墳時代中期に一般的に見られるものだが、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

②掘立柱建物跡 SB101（第 12 図）

1 間 × 4 間の掘立柱建物跡で、梁行 2.4 ~ 2.7m、桁行 5.6m を測る。

主軸は調査区北の等高線に平行しており、地形の制約を受けて建てられたと考えられる。

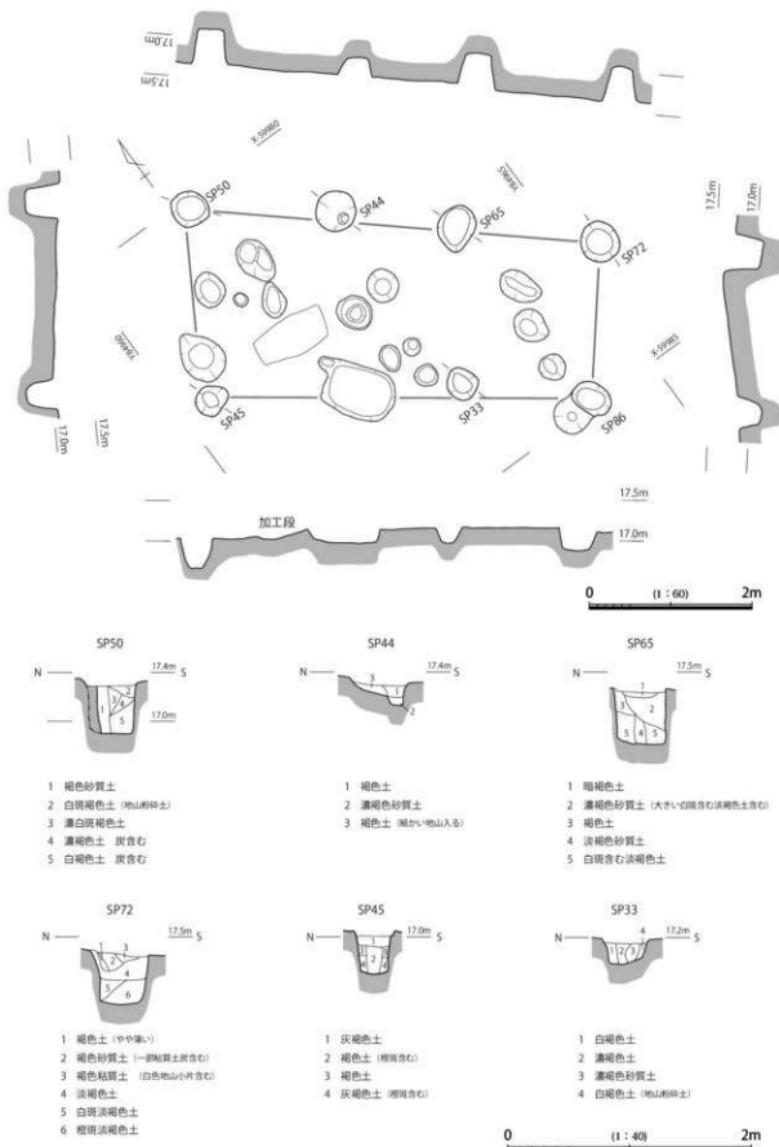
北東の桁方向の 4 基の柱穴（SP50・SP44・SP65・SP72）は、芯々距離 1.6 ~ 1.8m を測り、ほぼ等間隔にならぶ。このうち SP44 を除く柱穴には深さがあり、SP65 を半截したところ、径 14cm 程度の柱痕が確認できた。

これに対応する南西の桁方向では 3 基の柱穴（SP45・SP33・SP86）を検出している。地山が南西に低くなっているためか SP33 は浅い。SP45 と SP33 を半截したところ、径 14cm 程度の柱痕が確認できた。

遺物は、SP50 埋土から土師器の小片 2 点、SP65 から須恵器の小片 4 点（第 13 図 3）と陶器 2 点（第 13 図 4・5）、SP86 から須恵器片 2 点が出土している（第 13 図 1、2）。SP65 の遺物は一括して取り上げており、出土層位は不明である。しかし、柱穴埋土が硬く締まり近現代とは考えられないことから、陶器を客土中の紛れ込みと解釈すれば、須恵器の時期から、8 世紀初頭頃に建造された建物跡と推察する。

SB101 出土遺物（第 13 図）

第 13 図 1 ~ 3 は須恵器である。1 は蓋で、つまみ部周辺を欠損して端部だけが残る。端部は折り返され、調整は内外面とも回転ナデで、肩部外面はやや押え気味のナデが施されている。焼成は良好、色調は内外面が灰色、断面が若干褐色がかっている。径 16.2cm。2 は無蓋の壺で、口縁周辺部だけが残る。口径より体部最大径が大きいタイプで、口縁端部の折りは沈線で表現されている。調整は内



第12図 SB101 遺構図 (S=1:60・S=1:40)

外面とも回転ナデ、焼成は良好、色調は内外面が灰色、断面が淡灰色である。口径 11.8cm。3 は高台付壺の底部である。焼成があまくて風化が著しい。時期は 1 と 2 が出雲Ⅲ期、3 は出雲Ⅲ期以降に見られるものである。

第 13 図 4、5 は在地系の陶器である。1 は布志名産の可能性がある鉢で、口縁から体部にかけて残る。口縁は玉縁で、内外面に白色の釉が掛かるが、外面の下半分は露胎である。口径 21.5cm。5 は陶器の把手部で、無釉である。大きさや形状から、急須の把手の可能性がある。産地・時期は不明で、近世以前ではみられないものであることから、現代のものと思われる。

③柱列跡 SA102（第 13 図）

4 基のピット（SP51・SP43・SP39・SP74）が、芯々距離 1.6 ~ 1.8m で、ほぼ等間隔にならぶ。

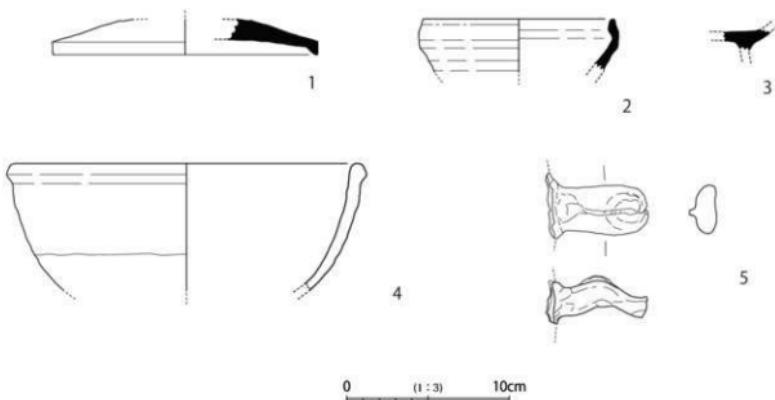
柱列の長さは 5.5m を測り、SB101 の桁行の長さとほぼ等しいことから、SB101 に準じる建物の桁方向にあたる可能性が高いが、これに対応する梁方向のピットが見当たらない。

軸は等高線とほぼ重なり、基本的に地形に即して建てられたと考えられる。

ピットは上端最大径 35 ~ 54cm、深さ 36 ~ 54cm を測り、半截したところ全てにおいて径 8 ~ 12cm の柱痕を観察することができた。

なお、SA102 は SB101 を切る位置関係にあり、SB102 とは若干軸が異なるもので、前後関係が存在する。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第 13 図 SB101 出土遺物実測図 (S=1:3)

④柱列跡 SA103（第14図）

3基のピット（SP01・SP02・SP03）が直線上にならび、その長さは2.4mである。

SP01・SP02の芯々距離は1.2m、SP02・SP03の芯々距離0.8mを測り、ピット間距離に相違がみられる。ピットは上端最大径36～54cm、深さ28～36cmを測り、半截したところ全てにおいて径10～16cmの柱痕を観察することができた。

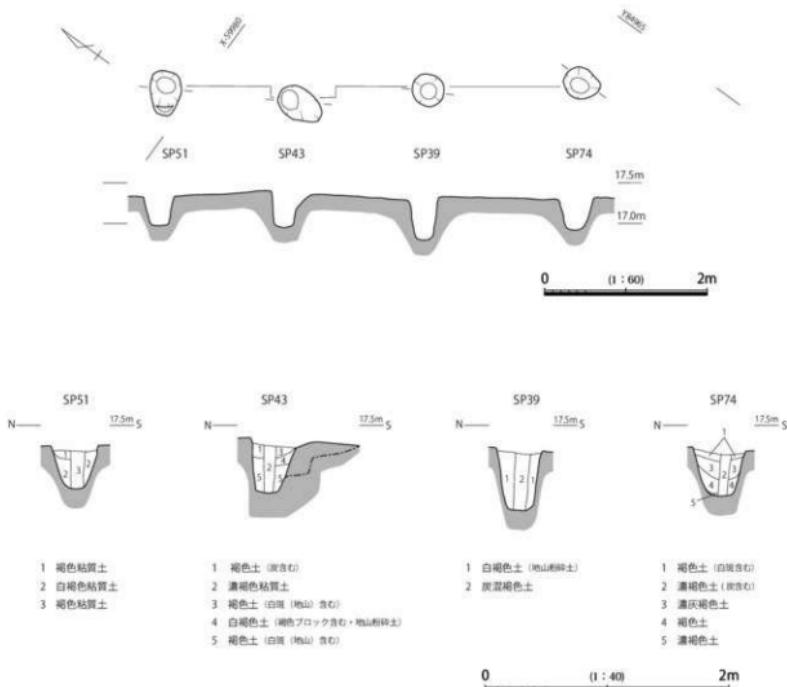
性格は不明である。

遺物は出土しておらず²、時期は不明である。

⑤柱列跡 SA104（第15図）

地山が東に傾斜する地山面で、東の崖に沿うピット2基（SP81・SP82）を検出した。

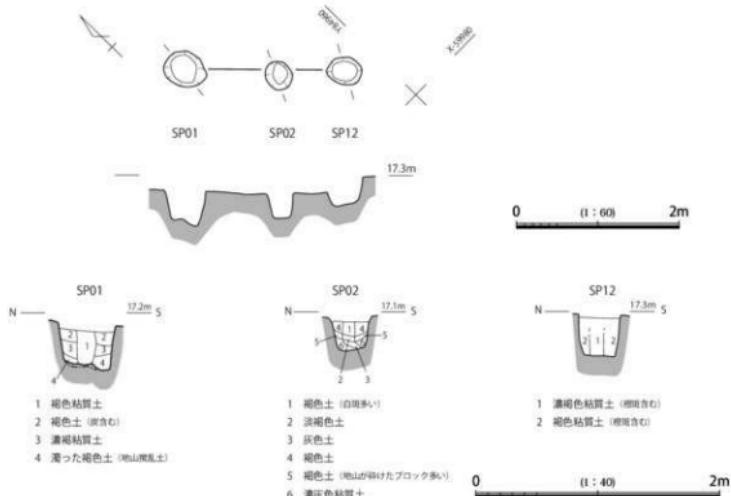
両ピットとも不安定な傾斜地に位置し、ピット間の芯々距離が2.5mであることから崖に沿う柵列の可能性がある。



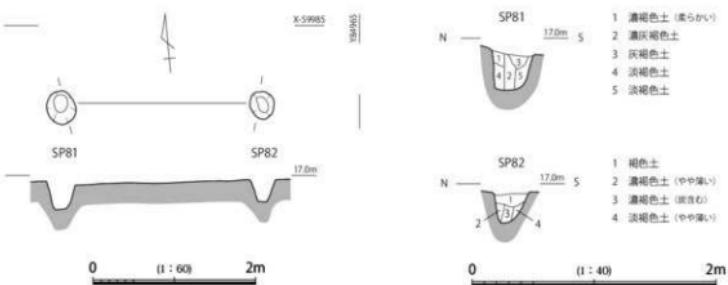
第14図 SA102遺構図 (S=1:60・S=1:40)

SP81は上端最大径36cm、深さ32cm、SP82は上端最大径29cm、深さ29cmを測り、半截したところSP81では径10cm、SP82では径8cmの柱痕を観察することができた。両ピットの断面には明瞭な柱痕が観察できるが、遺物は出土していない。時期は不明だが、埋土に縫まりが無いことから、近世後半以降の可能性が高い。

なお、ここで近世後半以降の可能性が高いとした理由は、SP61の軟らかい埋土中から18世紀頃の陶器が出土したことと根拠とし、埋土が軟らかいものを近世後半以降のピットとしている。近世後半以降のピットの大半は断面が浅いU字状を呈し、近世後半以降のピット断面に柱痕が存在するものは、東の崖に沿うSA104を構成するSP81とSP82だけである。



第15図 SA103 遺構図 (S=1:60・S=1:40)



第16図 SA104 遺構図 (S=1:60・S=1:40)

⑥溝 SD88（第17図）

断面U字状の溝で、長さ2.2m、幅30cm、深さ8cm前後を測る。埋土は若干の炭を含む灰色土1層である。

竪穴建物跡SI100を切り、方位的には掘立柱建物跡SB102に平行するように見えるが、性格は不明である。

遺物は出土しておらず、時期は不明である。

⑦土坑 SK36（第18図）

平面プラン隅丸方形の土坑で、長辺89m、短辺64m、深さ15cmを測る。

底部直上から壁面にかけて厚さ6～10cmの焼土と炭の層があり、その上に地山を搅乱した土(2・3層)がのり、その上面から土器類の極めて小さな破片が出土した。

壁面に被熱の痕跡はみられなかった。

性格、時期は不明である。

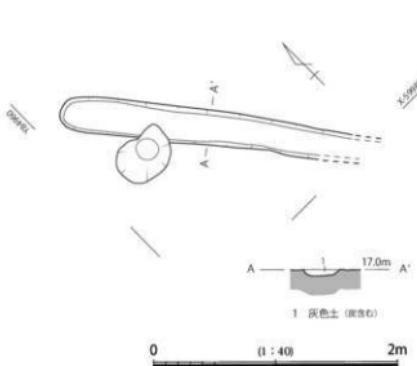
床面に厚い焼土と炭の層を持つ方形土坑の類例として、朝鮮菖蒲谷遺跡で検出されたSX18～21があげられるが、SX18～21は床面4隅に杭痕を持ち、4辺に沿う横板の痕跡が存在する。これに対し、SK36にはこれらの痕跡が無く、平面プランが小さめの長方形を呈する点で異なりがみられる。

⑧ピット群（第19～21図）

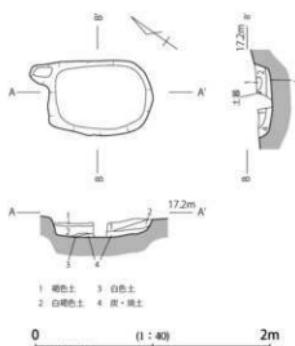
掘立柱建物跡や柱列以外でも多くのピットを検出したので掲載を行う。

ピットの時期は大別して、古墳時代と古代、近世との3時期が存在し、判別がつかないものもある。

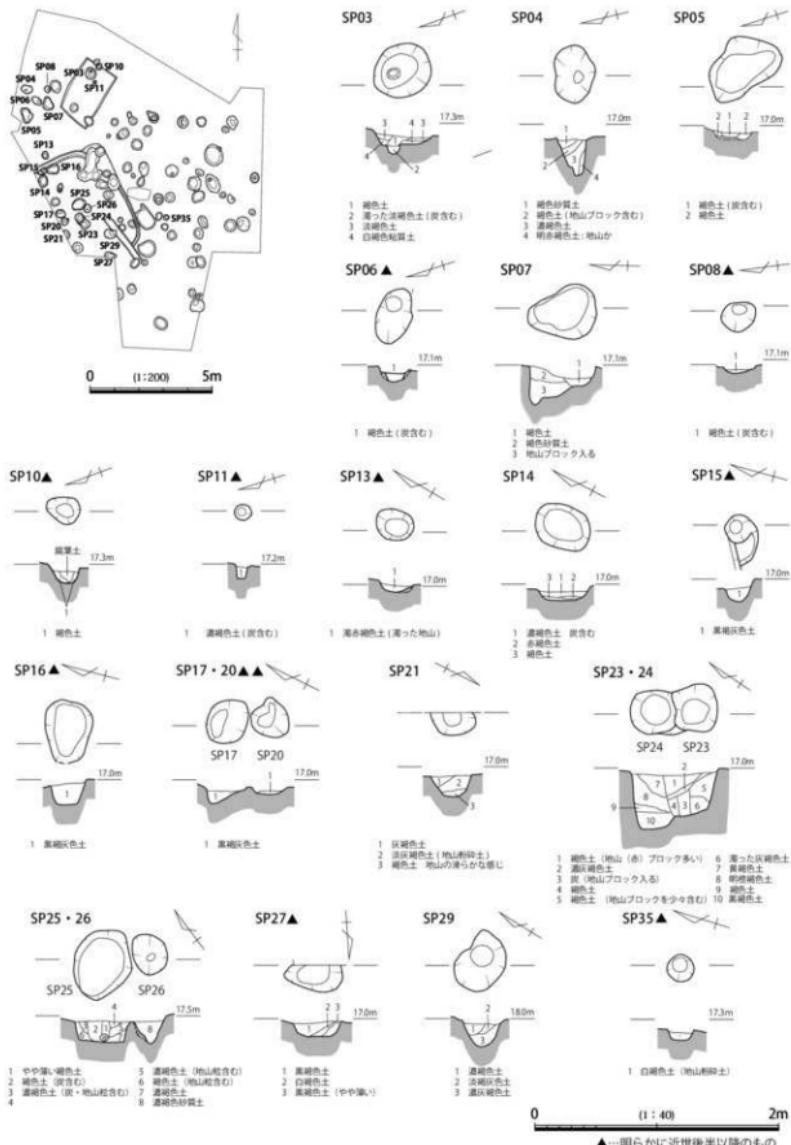
近世のピットは調査区北東を中心としたB2、B3、C2、C3区に分布しており、



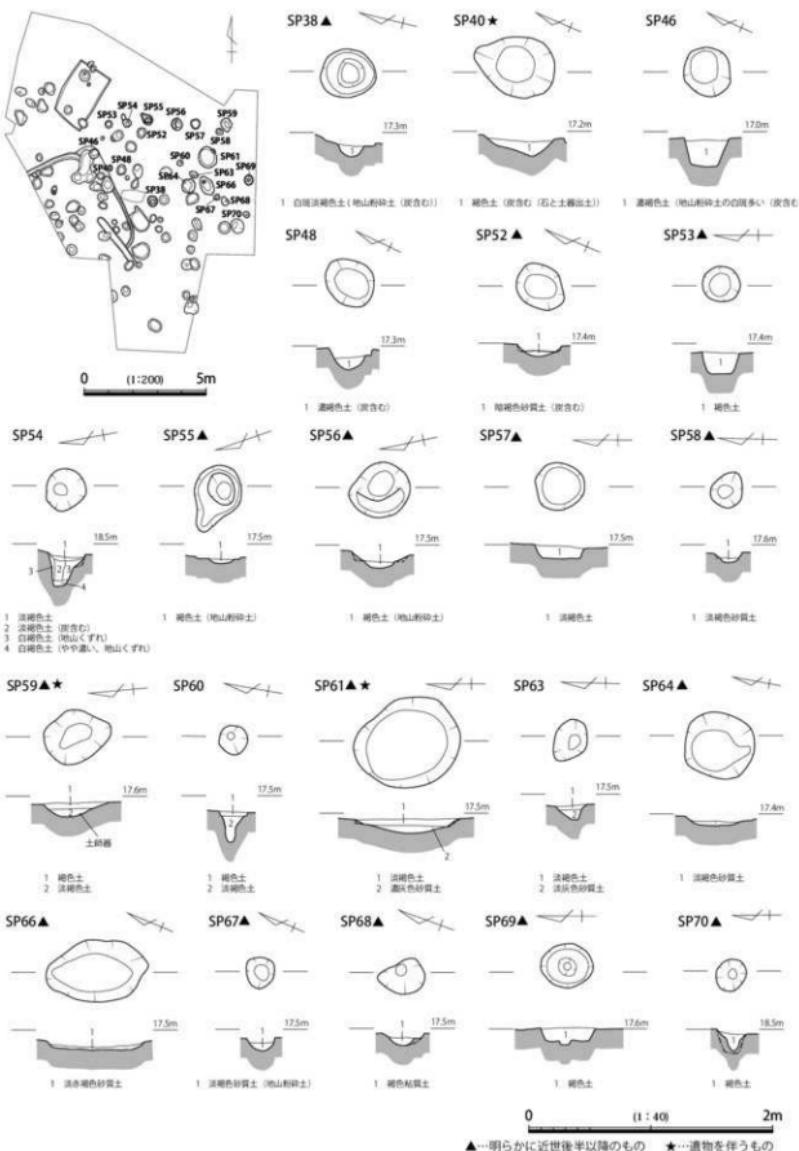
第17図 SD88 遺構図 (S=1:40)



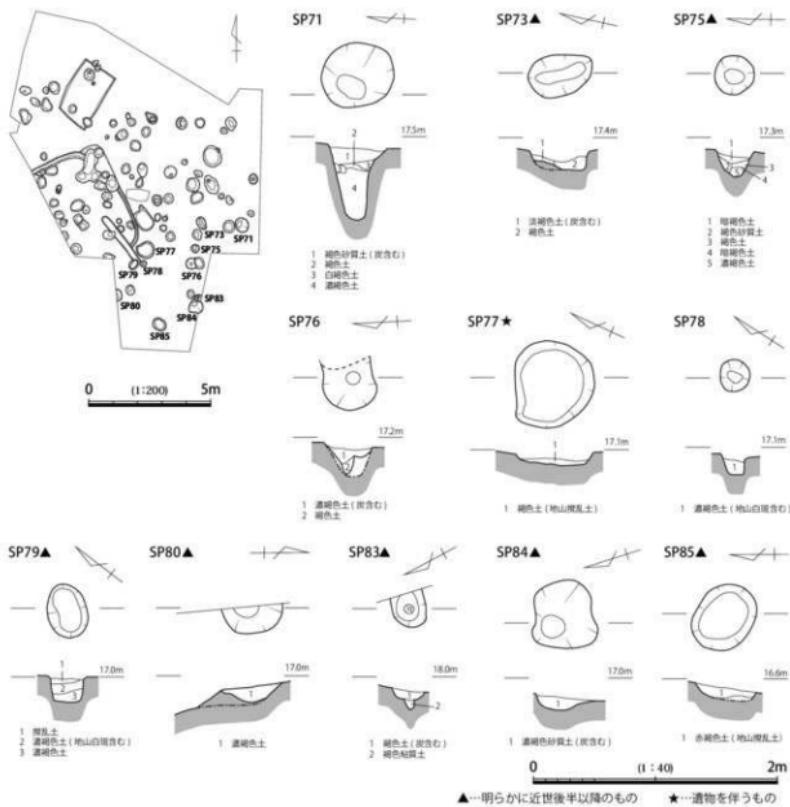
第18図 SK36 遺構図 (S=1:40)



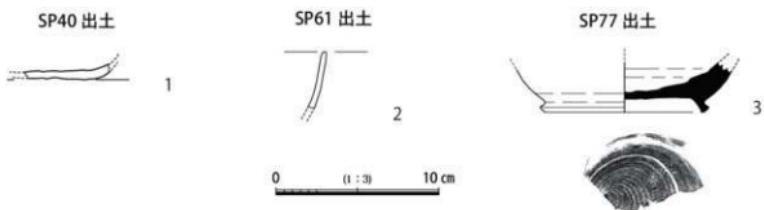
第19図 ピット遺構図(1) (S=1:40)



第20図 ピット遺構図(2) (S=1:40)



第21図 ピット遺構図(3) (S=1:40)



第22図 ピット埋土出土遺物実測図 (S=1:3)

これに対し、古代のピットはA2、A3、B2、B3、B4、C3区を中心に分布し、西の調査区外に向けてさらに広がる様相を呈している。浅い窪み状のピットや樹痕状のピットが多いが、SP23・SP24・SP25・SP54は硬い地山を円筒状に深く掘り下げ、半断面に柱痕が残るもののが存在する明らかな柱穴である。SP54の位置づけは分からぬないが、今回復元した建物以外にも建物が存在していたことが窺われる。

個別の詳細については第1表に掲載する。

ピット出土遺物（第22図）

第22図1はSP40から出土した、土師器の皿又は环の底部である。風化が著しいため調整は不明である。2はSP61から出土した肥前陶器の碗である。口縁付近だけの残存で、内外面とも透明釉がかけられている。17世紀末～18世紀頃のものである。3はSP77から出土した須恵器の底部破片で、器種はおそらく長頸壺であろう。底部切り離しは回転糸切で、低めの高台が付く。焼成は良好である。底径9.8cm。

第4節 遺構外出土遺物（第23図）

客土の中から土師器1点と須恵器4点、銭貨1点が出土している。

これらのうち図面化できたのは、第23図の2点だけである。

第23図1は須恵器の無高台の环の底部で、底部外面には回転糸切痕が残る。焼成は良好だが、摩滅が著しい。8世紀以降のものである。

2は銭貨である。江戸時代（近世）の寛永通寶で、裏面は無文である。直径2.4cm、孔は1辺6mm、厚さ1mm。



第23図 遺構外出土遺物実測図 (S=1:3・S=1:2)

第4章 総括

朝鈴橋ノ谷遺跡は大橋川に近い丘陵の上に位置している。狭隘な調査区のわりに多くの遺構を検出したが、近世以降に遺構面に及ぶ削平が行われており、遺構に伴う遺物はほとんど出土していない。このため、今回の調査では遺構の性格と時期を遺物の面から明らかにすることができなかった。

以下では、遺構の変遷について記述してまとめとしたい。

1. 遺跡の変遷

遺構の時期確定が困難な状況であるが、本遺跡はⅠ～Ⅲ期の3時期に分けられる。ここでは各時期ごとに景観の復元を試みる。

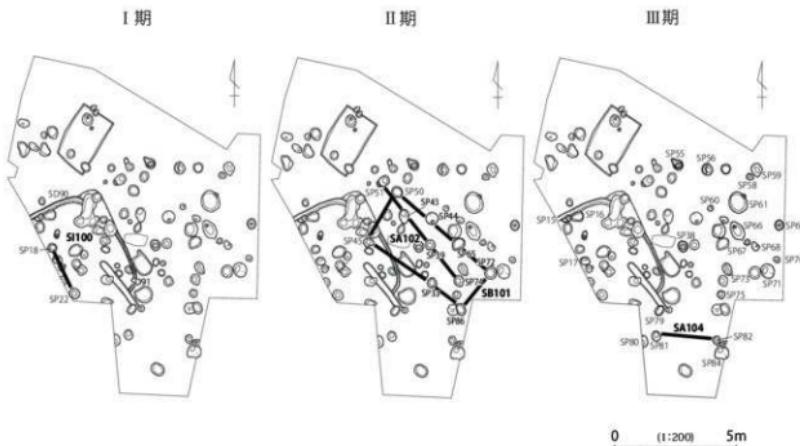
①Ⅰ期(弥生時代後期後半～古墳時代中期頃)

調査区西端で隅丸方形の竪穴建物跡を検出した。遺物が出土していないため詳細な時期はわからないが、竪穴建物跡の平面プランの形から弥生時代後期後半～古墳時代中期とみる。

当遺跡から約60m南の丘陵にある朝鈴菖蒲谷遺跡では古墳時代前期でも比較的早い時期の土器棺墓と、方墳の周溝と推定される溝が検出されている。当遺跡と隣接する丘陵に位置することから、関連遺跡の可能性を考えられる。

②Ⅱ期(奈良時代初頭以降)

主な遺構として、8世紀初頭頃に建てられた桁行5.6mの掘立柱建物跡SB101がある。また、全長5.5mの柱列SA102の全長はSB101の桁方向の長さとほぼ等しいことから、同規模の掘立柱建物を構成していた可能性が高い。両遺構には切り合い関係が存在することから、同じ場所で建て替えが行



第24図 遺構変遷図 (S=1:200)

われたものと推測される。なお、2棟の建物の軸は地形に沿うものである。

当遺跡の西には、出雲国庁の北にある十字街と隱岐国へ渡る千酌の駅家を結ぶ官道、枉北道（魚見塚遺跡）が南北方向に通り、2棟の建物は枉北道を見おろす東の丘陵上に位置していたことになる。

③Ⅲ期（近世後半以降）

当遺跡から東にかけて存在する細長い平坦地は、北の丘陵がカットされ、その土を南の斜面に盛つて造成されている。調査区内ではⅡ期以前の遺構面が削平されたうえで、客土で均して平坦地が造られた状況が観察された。この平坦地が造成された時期は、地山面で検出したピットの埋土から出土した陶器から17世紀末～18世紀か、それ以降と判断する。

2. 結語

朝酌橋ノ谷遺跡では、最も古い遺構として隅丸方形の竪穴建物跡SI100を検出した。

周辺では魚見塚古墳の墳裾で弥生時代後期の住居跡が検出され、キコロジ遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しており、この頃には当遺跡からキコロジ遺跡の間にかけて集落が営まれていたことが推定される。墓域は南隣りの丘陵に位置する、朝酌菖蒲谷遺跡の方墳や土器柏墓と考えてよいであろう。^{註1}

7世紀末には、国庁の北にある十字街から島根郡家や隱岐国へ渡る千酌の駅家に至る古代の官道、枉北道（魚見塚遺跡）が敷設され、当遺跡はこの道路沿いに位置している。今回検出した掘立柱建物跡SB101・SA102は、規模が小さいこと、建物軸が正方位にのらないことから、公的な施設とは考えづらく、枉北道沿いに営まれた庶民の生活の跡とみられる。

『出雲國風土記』（以下『風土記』）島根郡条には“朝酌促戸”^{註2}は良好な漁場であり、自然に市場ができる庶民の生活が脈わっていたことが描かれ、朝酌渡という公的施設の存在も記されている。当遺跡で検出した掘立柱建物跡SB101・SA102も、『風土記』に描かれた“朝酌促戸”的景観の一部をなしていたに違いない。

朝酌周辺は『風土記』の具体的な記述があり、奈良時代の様子がイメージできる恵まれた地域である。今後のさらなる調査成果を待ち、考古学的手法からの景観復元に期待したい。

【第4章 註】

1. 松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団『魚見塚遺跡・朝酌菖蒲谷遺跡発掘調査報告書』2018
2. 本書の、第2章第2節2参照。

第1表 遺構観察表

遺構名	グリッド	種類	時期	大きさ [cm]	深さ [cm]	備考	年時期	グリッド	種類	時期	大きさ [cm]	深さ [cm]	備考
SP01	A2	ピット	○	55×45	37	SA103 杖窟有	SP51	B2	ピット	○	54×37	35	SB102 杖窟有
SP02	A2	ピット	○	36×33	28	SA103 杖窟有	SP52	B2	ピット	▲	42×35	10	
SP03	A2	ピット	○	50×43	19		SP53	B2	ピット	▲	31×29	17	
SP04	A2	ピット	不明	47×33	32	粗か	SP54	B2	ピット	○	33×32	26	杖窟有
SP05	A2	ピット	○	65×43	5		SP55	B2	ピット	▲	58×44	6	
SP06	A2	ピット	▲	40×28	11		SP56	B2	ピット	▲	50×45	7	
SP07	A2	ピット	不明	55×44	30	粗か	SP57	B2	ピット	▲	40×40	11	
SP08	A2	ピット	▲	28×23	6		SP58	C2	ピット	▲	30×25	8	
SP10	A2・B2	ピット	▲	28×22	14		SP59	C2	ピット	▲	55×44	11	近世瓦川土
SP11	A2	ピット	▲	14×12	11		SP60	B3	ピット	不明	23×23	25	
SP12	A2	ピット	○	43×34	35	SB103 杖窟有	SP61	B3	ピット	▲	86×73	12	陶器出土(第22回)
SP13	A3	ピット	▲	33×25	7		SP63	B3	ピット	不明	37×27	12	
SP14	A3	ピット	○	48×35	10		SP64	B3	ピット	▲	57×53	4	
SP15	A3	ピット	▲	48×25	17	SP16を切る	SP65	B3	ピット	○	58×45	45	SB101 杖窟・調査器
SP16	A3	ピット	▲	50以上×40	17	SP15に切られる	SP66	B3	ピット	▲	84×50	7	
SP17	A3	ピット	▲	41×33	12		SP67	B3・C3	ピット	▲	26×24	10	
SP18	A3	ピット	○	37×34	40	SI100 杖窟有	SP68	C3	ピット	▲	38×27	9	
SP20	A3	ピット	▲	35×30	6		SP69	C3	ピット	▲	42×36	14	
SP21	A3	ピット	○	37×14以上	17	西に続く可能性あり	SP70	C3	ピット	▲	28×23	15	
SP22	A3	ピット	○	44×38	32	SI100 杖窟有	SP71	C3	ピット	○	58×53	58	柱穴の可能性有
SP23	A3	ピット	○	39×34	33	SI100 内 杖窟有 SP24を切る	SP72	C3	ピット	○	50×47	42	SB101 柱穴の可能性有
SP24	A3	ピット	○	38×36	47	SI100 内 杖穴の可能性有 SP23に切られる	SP73	B3	ピット	▲	54×34	15	
SP25	A3	ピット	○	60×48	17	SI100 内 杖窟有	SP74	B3	ピット	○	43×37	38	SA102 杖窟有
SP26	A3	ピット	○	35×30	18		SP75	B3	ピット	▲	32×32	21	
SP27	B3	ピット	▲	49×14以上	11	南に続く可能性有り	SP76	B3・B4	ピット	不明	45×35	25	柱穴の可能性有 SP96に切られる
SP29	B3	ピット	○	48×35	50	SI100 内 柱穴の可能性有 SP88を切る	SP77	B3	ピット	不明	73×68	10	調査器(第22回)
SP33	B3	ピット	○	35×25	20	SB101 杖窟有	SP78	B3・B4	ピット	○	25×25	14	SD88を切る
SP35	B3	ピット	▲	28×21	8		SP79	B3・B4	ピット	▲	44×32	20	SD88を切る
SK36	B3	土坑	○	89×64	15		SP80	B4	ピット	▲	38×25以上	12	西に続く可能性あり
SP38	B3	ピット	▲	45×40	9		SP81	B4	ピット	▲	42×37	32	SA104 杖窟有
SP39	B3	ピット	○	42×39	50	SA102 杖窟有	SP82	B4	ピット	▲	35×30	25	SA104 杖窟有
SP40	B3	ピット	○	67×50	13	SD91 を切る 上耕堀(第22回)	SP83	B4	ピット	▲	25×20	15	東に続く可能性あり
SP43	B3	ピット	○	58×38	43	SA102 杖窟有	SP84	B4	ピット	▲	55×50	11	
SP44	B3	ピット	○	50×50	23	SB101 浅い	SP85	B4	ピット	▲	58×47	10	
SP45	B3	ピット	○	17×17	35	SB101 杖窟有	SP86	B3・B4	ピット	○	48×46	30	SB101 SP76を切る 調査器
SP46	A3・B3	ピット	○	42×39	23		SD88	B3	溝	○	220以上×30	8	SP29.78.79に切られる
SP48	B3	ピット	不明	42×38	17		SD90	A3	溝	○	230以上×25	7	SI100壁際溝
SP50	B2・B3	ピット	○	45×45	43	SB101 杖窟有 上耕堀	SD91	B3	溝	○	250以上 15	7	SI100壁際溝

遺物観察表

第2表 遺物観察表

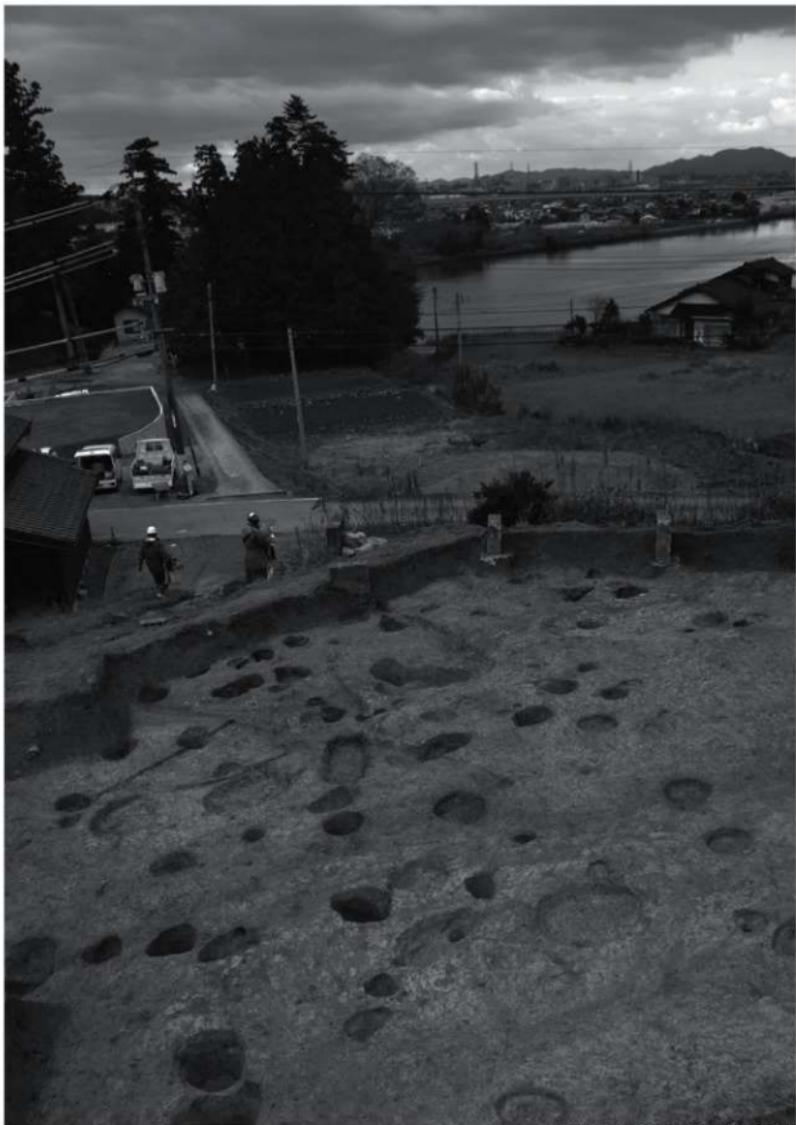
土 器

標図番号	種類	器種	法面(cm)	胎 土	焼成	色 調	調整・手法の特徴	残 存	備 考
13-1	須恵器	壺	口徑(16.2) 1mm前後の砂粒含む	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ		口縁部 20%	
13-2	須恵器	壺	口徑(11.8) 微砂粒若干含む	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ		口縁部 25%	
13-3	須恵器	高台付壺	—	微砂粒含む	不良	外 灰白色 内 白色	外 回転ナデ 内 風化	底部 5%	
13-4	陶器	鉢	口徑(21.5) 実	良好	外 白色 内 白色	外 内		口縁部 5%	内側面：施釉 全体部：無釉
13-5	陶器	(把手)	幅2.9 厚1.6	実	良好	外 灰白色 内 灰白色	外 手づくね 内 手づくね	把手部 100%	急削の把手か
22-1	土師器	(底部)	—	微砂粒含む	良	外 明赤褐色 内 明赤褐色	外 風化 内 風化	底部 5%	
22-2	陶器	碗	—	実	良好	外 淡褐色 内 淡褐色	外 内	口縁部 5%	内外面：施釉 肥前 18世紀頃
22-3	須恵器	長頸壺	底径(9.8)	1mm前後の砂粒含む	良好	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、回転糸切	底部 20%	
23-1	須恵器	壺	—	1mm前後の砂粒含む	良	外 灰色 内 灰色	外 回転ナデ 内 回転ナデ、回転糸切	底部 25%	8世紀以降

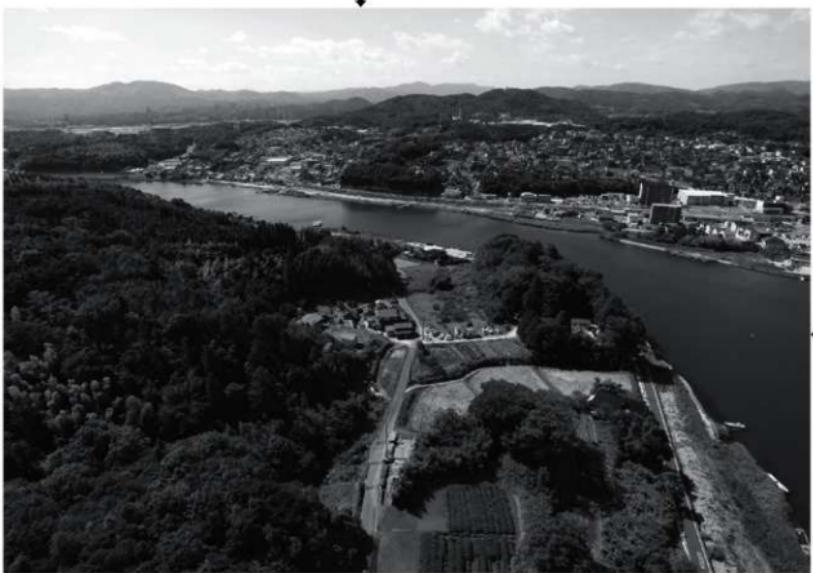
錢 貨

標図番号	種類	直 径(cm)	孔 径(cm)	厚 さ(cm)	質 量(g)	残 存 率(%)	質 量/直 径	備 考
23-2	鹿永通貫	2.4	0.6	0.1	2.0	100	0.08	ハジ貫(新鹿永)

写真図版



朝駒橋／谷遺跡から大橋川を望む



朝鈴橋／谷遺跡空中写真（北上から） ↓と ← の交点が遺跡位置



朝鈴橋／谷遺跡調査前近景（西から）



遺構検出状況 1（東から）



遺構検出状況 2（東から）



SI100 検出状況（西から）



南崖に沿う盛土層 $\beta - \beta'$ (西から)

図版 4



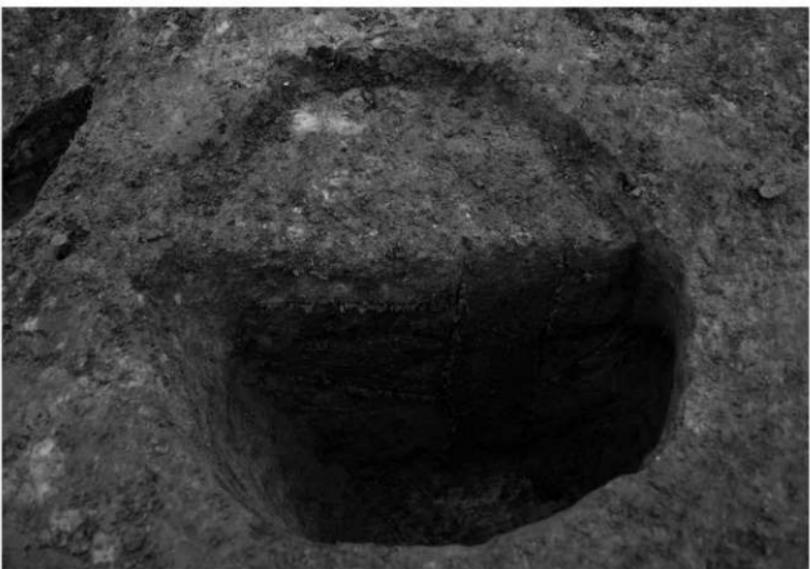
SP40 遺物出土状況（東から）



SK36 土層（西から）



SP39 柱痕（西から）



SP72 柱痕（西から）

图版 6



出土遗物

報告書抄録

ふりがな	あさくみはしのたにいせき						
書名	朝酌橋ノ谷遺跡						
副書名	大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書						
卷次	I						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第188集						
編著者名	江川幸子・川西学						
編集機関	松江市教育委員会 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	2018年8月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
朝酌橋ノ谷遺跡	島根県 松江市 朝酌 町 972-3	32201	D-1170	35° 27' 21" 133° 6' 10"	2017.12.01 ～ 2017.12.22	108.26m ²	宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
朝酌橋ノ谷遺跡	集落跡	古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡	土師器 須恵器	古代官道(枉北道)沿線の建物跡		

松江市文化財調査報告書 第188集

大橋川改修に伴う個人住宅移転予定地内発掘調査報告書1

朝 酬 橋 ノ 谷 遺 跡

平成30(2018)年8月

編集・発行 島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 千鳥印刷株式会社
島根県松江市春日町344-2

